Magic　Story(仮)

001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｇｉｃ　Ｓｔｏｒｙ（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１７５６Ｙ

【作者名】
００１

【あらすじ】
～天才とか、落ちこぼれとか言われる存在ではなく、平々凡々な少年の物語～　この作品は、所謂【主人公最強】ではありません。ある程度は【強】にはしますが……　駄文ではないのだろうか、いや駄文だ。これ大事。　それでも良いという方はこれを紐解いてみては？

始めに（前書き）

あぁ、始まった。

どーも初めまして作者の００１です。

この作品は友人に「一緒に書かないか？」と誘われ書きました

厨二っぽい時もあるかもしれませんが、それはご愛嬌っつうことで

始めに

これは、どこにでも居そうな人物が
織り成す物語である

†注意†
何かがきっかけとなり秘められし力が目覚めるとか
チートとかにする予定は無いと思うんで。

まぁある程度は強く設定はするとは思いますが
主人公最強って感じではありませんのであしからず。

平凡とか書いてあるのに【強】という矛盾点

まぁ、あと色々と至らない点もあるとはございますが、
なるべく、というか完璧に温かい目で読んでみてください。

友人と一緒に制作してるんで、更新は不定期になると思います。

最後に、駄文だとはおもいますが、お楽しみください。

次から始まるはず……恐らく

始めに（後書き）

まぁ、あれですよ　今回は注意書きみたいな？

次話から本編が始まるはず

乞うご期待……されても困るのでやっぱり然程せずに

あぁ、マジ執筆してる人は尊敬に値するね。うん。

まぁ、それでは次話お会いしましょう

ＥＰＩＳＯＤＥ：１（前書き）

これから本編がはじまります

温かい目でご覧くださいな

EPISODE：1

「怠い、めっちゃ怠い。そもそも入学式に在校生が出席するっつうのが無い。
入学式なんて新入生の親御さんでやりゃ良いのに。」

いきなり、愚痴を零すのは『トルニア魔法学校』の2年生である、陸奥友斗（ムツユウト）

ちなみに、トルニア魔法学校は世界に6つある魔法学校のなかでも、ちょっと、いや、かなりの大規模を誇る学校である。
まぁ仔細は後々語ることにして。

「っつうか、校長、話ながくね？もうかれこれ10分近く話してんだけど。
最近、あれなんか禿げてきてね？って気にしてるくせによぉ」

校長の話の愚痴もとい、頭の事情を言っているのは、友斗と同じ2年生である、リュート＝スクライン

「マジでか？」

「どっちに対して？」

「頭の方」

「あぁ、マジだぞ。この前、『ここ最近脱毛とかがヤヴァイ』的な

事を聞いたからな。」

「マジ、ドンマイやなぁ。つうか去年辞めたのになぜいんの？」

「新任の校長がまだこっちに到着してないらしく急遽呼ばれたんだとさ」

へぇと納得したような友斗。

「まぁ、明日からの新しい学校生活を存分に楽しめよ新入生諸君。」

入学式も難なく終え、（新任の校長は見えなかったが）

「今日はもう何も無いからゲーセンにでも行くか？」

「良いねぇ。確か新台が入荷されたはず。」

友斗とリュートは屋上を後にした。

ＥＰＩＳＯＤＥ：１（後書き）

ども００１です。

我ながら、これはどうなんだろうと思いました

だが、悔いはない。（キリッ

誹謗中傷をするなら優しめで

次話で会えたら会いましょう　それでは

ＥＰＩＳＯＤＥ：２（前書き）

待ってた人も別に待ってない人も、ども００１です

勉強もしなければ……

まぁ、それではＥＰＩＳＯＤＥ：２始まります

EPISODE：2

鳥がさえずり、多くの人が行動を開始する朝。

友斗も例外ではなく、支度をしていた。

「うっし、今日は特に授業するわけでもないからこんなもんかね」

支度も終え、まだまだ時間には余裕があるが、

「ほんじゃ、まっ行ってくるわ……まぁ、既に俺一人しか居ないからなぁ。

返答されたらされたらで怖いわな。」

上記にある通り友斗は所謂、天涯孤独と言われるものである。

友斗は家を出て行った。

「やっぱ、昨日は金使いすぎちまったかねぇ。　もうちょい抑えるべきだったか？

いやまだ余裕はあるはず……」

とぶつくさ言ってる隣を、

「やべぇぇ、遅刻する。入学した翌日に遅刻は色々とヤバイ。」

赤い髪をした少年が駆け抜けっていった。

暫し、呆然とし

（…いやナイ、ナイな、これはナイ。だってまだ時間に余裕あるもの。アレか時間を

見間違えましたってか？そんなもんはあの、）

考えてた最中に

「よーっす、友斗。」

声を掛けられた。

「あ、バカ。あっ、まちげぇた、よっすリュート。」

思わず、今思ってたことを漏らす友斗。

「バカっつたよな？今完璧言ったよな？」

「気のせいじゃね？幻聴だ、幻聴。うんそうに違いない。」

「いや、認めろよ。言ったと認めろよ。」

「認めへん！」

と朝から賑やかな友斗とリュートの２人。

「はぁ、まぁイイや。んで、何があったん？」

「ん、あぁ昨日お前に貸した金や賭けをどうすっかなぁと」

「忘れろや、阿呆。」

「だが、断る」

「即答！？　まぁ本当は？」

「お前みたいに時計を見間違えて、「遅刻するぅ」って慌ててた奴を見かけてさぁ。似た奴が居ることに吃驚してたわ。」

「うわっ、そいつ恥ずかしい奴じゃん。」

「お前が言えた義理かよ。」

2人が騒がしくやり取りをしていると後ろから、

「おはよう、2人とも。君たちは朝から元気だね。」

呆れたような声色で、挨拶された。

「おっす、んで、わりぃかジュダイ。」

「おぅ、おはようさん、ジュダイ。あと、喧しいのはリュートだけだ。」

ちゃっかり自分は五月蝿くないことをアピールする友斗。

「俺だけってなn『それもそうだね、友斗』……オィ」

言葉をかぶせられ不満顔のリュート、何事も無かったかのようなすまし顔のジュダイ＝ホークベルク。

「何故に、被せたジュダイ？」

やはり、台詞を被さられたのは辛いリュート。

「そんなことよりジュダイはこんな時間にどうしたんだ？」

「そんなことって、ひｄ『あぁ、妹と色々あってね』……またかよっ！」

「そういや、妹さんもここに入学だっけか？」

「そうだよ。それで今朝色々とね……」

アハハと乾いた笑いを零すジュダイ。

「まぁ追求はしねぇけど」

「そう言って貰えるとありがたいよ、友斗。」

「……俺は無視かよぉ」

無視されるリュートと、リュートそっちのけで話す友斗とジュダイ。

「置いて行くぞ？リュート」

「ヒデェ。」

「まぁ、さっさと行こうぜ、リュート、ジュダイ。」

「おぅ。」　「そうだね。」

こうして3人は笑いながら、校門をくぐった。

ＥＰＩＳＯＤＥ：２（後書き）

なんか、思ってたよりも進まなかったｏｒｚ

本当に文才が無いな俺。途中で挫折しそうになった（，・ω、・）

さて、このＥＰＩＳＯＤＥ：２では新たに、ジュダイ＝ホークベルクが登場

追々設定編も挟まないとかな

感想・指摘なんでもござれ。
お待ちしてます。

それでは、また次回。
会えたらお会いしましょう。

ＥＰＩＳＯＤＥ：３（前書き）

調子にのって２話更新

なのにＭａｇｉｃ（魔法）の“マ”の字もない

まぁ、おそらくまだ先でしょう

それはさておき、それでは、どうぞ

EPISODE：3

「っつうか、何故に入学式翌日に2年生のクラス発表を行うかなぁ？前日なり、当日にやれよなぁ。たくよぉ」

取り敢えず、愚痴る友斗。

「まぁ、教師たちも色々とあんだからしゃーないんじゃね？俺は、俺で色々と調べられるから有難いけどね♪」

嬉しそうなリュート。こんなんでも、トルニア1の情報通とも言われている。……らしい。

「「キショイ」」

そんなリュートに引いている友斗&ジュダイ。

「なぜ、ハモるし？」

若干凹んでるリュート。

「先生達にも色々とあるのだろう。差が開きすぎないように等な。」

教師陣をフォローしつつ、友斗を慰めるジュダイ。

とまぁ、こんな感じに談笑しながら校門をくぐる3人。

同時に、

「ッギャァァァァァァァ」

奇声、もとい悲鳴が聞こえてきた。
「「……え、何これ？」」
「な・ん・だ・こ・れ！」
呆然とする友斗・ジュダイ。打って変わって楽しそうなリュート。
「行くなら最初にクラスを見てから行くがいい。」
今にも飛んで行きそうなリュートに釘を刺すジュダイ。
「分かってるって。」
とりあえず分かってなさそうなリュート。
あ、もうダメだこいつ、など思いながらも
クラスが掲載されてる場所まで移動する3人。
「なんだ、俺ら3人また同じ組じゃねぇか。」
口とは裏腹に、嬉しそうな友斗。
「D組で担任は、カリン先生か」
と言うのはジュダイ。
「「もう既に居ないとか」」
クラスが分かった瞬間に颯爽といなくったリュート。
「……まぁ、俺たちはクラスへ向かうとしようか？」

「あぁ、そうするか。一応、リュートの情報を楽しみにしとくか。」
呆れつつもクラスへ向かうことにした、２人。

友斗とジュダイがクラスに着いて暫くしてから、リュートもクラスへ現れた。
「いやぁ、こんなことあるもんなんやなぁ。」
なんだか感服した様子のリュート。
「ようやく来たか、バカ。」
「君は変わらないね。アホ」
入ってくるなり罵言を言う2人
「いきなりそれは酷過ぎる。」
打ちひしがれるリュート。
「「そんなことより、どうしたん（のかね）？」」
それを目にかけない2人。
気を持ち直して集めてきたものを教えるリュート。

「あぁ、時間の都合上ざっくりだけど？『別にいいぞ』なら、続けるわ。
あの悲鳴は1年生の物だったわ。名はライト＝ディスケンス遅刻しそうだと
慌てて来たが勘違いだと気づき、落ち込みながら歩いていた際に、
女生徒こっちも同じく
1年で、獅堂美咲（シドウミサキ）と衝突、そして倒れこみ胸を揉んだ？触った？らしい。」

手帳をしまい、肩を竦めるリュート

「なんてベタな。いつのマンガだよ。っつうか今朝の奴がそいつっつうオマケ付きかよ。オィ。」

「本当にそんなことも起きるものなんだな。」

それを聞いて呆れる友斗と、感服しているジュダイ。

「この他にもまだあ……」

リュートが続けようとした際に、鐘がなり担任の教師が入ってきた。

「さっさと席に付け、貴様ら。」

凛とした口調で話す女性。

「んげ、カリンさん。何で此処に……」

ちょっとばっか慌てるリュート。

「そんな分かりきったことを聞いてどうするというのだ？」

「マジで、友斗？」

「あぁ、マジだ。ついでに言うと確認しなかったリュートお前が悪い。」

違うという一縷の望みがあっさりと切られた。
リュートに味方はいないようである。

「諸君、知っている者もいるとは思うが、この２－Ｄを受け持つ事になった
カリン＝ハートレットだ。この１年間よろしく頼むぞ。」

かくして、新たな生活が始まった。

EPISODE：3（後書き）

これ、読んでくれてる人いんのかねぇ
需要ないんじゃねと思ってきた此の頃。
自分で言っといて悲しくなってきた（，；ω；、）

まぁ、微々たるものですが前進してますよ

あぁ、もうそろそろ本格的に魔法を
考えなくてはいけない。

全く以て無いっていうわけでは無いんですけどね……

まぁ、これは置いといて

それでは皆さん　↑読んでる人が居るかは気にしない
また次回会えたらお会いしましょう（$・・）／~~~

EPISODE：4（前書き）

適当なんだぜ

EPISODE：4

―入学式から早2週間。

トルニア魔法学園では1年生に魔法について2年生が講義する。

これは、1年生にとって先輩との交流の場として、2年生にとっては、

復習として、等の目的がある。

今は、第1闘技場にて2－Dの生徒が1－Aに教えている。

「そんじゃ、まぁ俺らも始めるとしますか。まずは自己紹介からっつうことで。

俺は、リュート＝スクライン。ヨロピク」

仕切るのはリュート。

「此奴は置いといて。名は、ジュダイ＝ホークベルク。そこにいるアンナの兄だ。」

リュートを流し、自己紹介するジュダイ。

「最後に、陸奥友斗だ。あっ、因みにそこの馬鹿（リュート）と万事屋ちゅうものを

やってるから、ご贔屓に頼むわぁ。」

取り敢えず、宣伝しておく友斗。

「俺のライフはとっくにゼロだ。今度は1年生諸君ヨロシク。」

深い傷を負ったが、進行はきちんと行うリュート。

「あっ、あぁ1－Aのライト＝ディスケンスです。今日は宜しくお願いします。」

呆然としながらも、自己紹介をする、ある意味有名人のライト。

「私は、獅堂美咲よ。ジュダイさんは、お久しぶりですね。今日は宜しくお願いしますわ。」

こちらも、ある意味有名な美咲。ジュダイとは顔見知りな様子。

「アンナ＝ホークベルクです。友斗さんとリュートさんもお久しぶりです。今日は、宜しくお願いします。」

先ほど、あった通りジュダイの妹であり、友斗・リュートとは顔なじみな様子。

「朝霧涼介（アサギリリョウスケ）です。夢かつ目標は、リュートさんのような情報屋です。」

リュートが目標のような涼介。

「あっ、僕は井上明日香（イノウエアスカ）。ヨロシクね。」

僕っ娘？ボーイッシュと言えぃ。

「そんじゃまずは、魔法についてだな。魔法は、誰もが皆使える代物じゃない。
家柄で使えたり、突拍子もなく使えるようになったり、とかまぁ様々だな。
今は、差別がほぼ無くなり、平等だか一昔前は厳しい物があったらしい。
まぁ、これは置いといて、魔法には属性がある『火・水・氷・土・風・雷・光・闇』の８種類が基本だな。他にもあるが、それは後々分かるだろう。ここまでで聞きたいことはあるか？」

分からないことあるか確認するリュート。

「無いみたいだな。こっからは、ジュダイが説明すっから。」

魔法の事について説明した、リュート。

「ここからは私が説明しよう。魔法には、ＢＡＳＩＣ・ＳＴＡＮＤＡＲＤ・ＥＸＴＲＥＭＥ・ＭＡＸＩＭＵＭ・ＥＸＣＥＬＬＥＮＴの５種類に分けられる。ＢＡＳＩＣは基礎、ＳＴＡＮＤＡＲＤは標準、ＥＸＴＲＥＭＥは上級、ＭＡＸＩＭＵＭは最上級、ＥＸＣＥＬＬＥＮＴは最高級といった様にな。
おまけだが３年に進級するときは、ＥＸＴＲＥＭＥを１つ習得することが条件でもある。」

段階について説明したジュダイ。

「私は、ここまでだな。次は友斗からだ。」

友斗に回すジュダイ。

「……えっ、何を説明しろと？もう何もねぇよ。どうしたらいいんだよ、俺は。
ぶっちゃけ、面倒だったから説明せずに済んで嬉しいけどさぁ。」
何も説明することが残ってない様子。
「時間余っちまったな。どうすんだよリュート。」
これから、どうするのか確認する、友斗。
「どうすっかね。……何も考えてないんだよねぇ。」
何でもないように言うリュートに、溜息を吐く友斗・ジュダイ。
「溜息つくなし。ちょうどに、終わるかなと考えてたんだよ、こっちは。」
開き直ったリュート。
駄目だ、こいつと思った、友斗&ジュダイ。　呆然とする1年生達。
「何をしているんだ？お前達は？」
「あぁ、カリンさんか。時間が余っちゃってね。」
やれやれと肩を竦める友斗。
「先生をつけろ莫迦者。」
そう言いながら、友斗を叩くカリン。

「ッテェ、何も叩くことはないじゃん。つっても残り時間どうしたら良いですかね？」

「貴様らのことを話せば良いだろう。」

「あぁ、なるほど。そうしますか。」

カリンの考えに賛成するリュート。

「いきなり現れんなよ。吃驚すんだろうが。」

いきなり現れたリュートに驚く友斗とカリン。

「それじゃ、万事屋について。万事屋は報酬次第で何でもやる。因みに報酬はお金だったり、飲食物だったりとか色んな物がある。払うのは事前・事後に関わらねぇのよ。」

万事屋について説明するリュート。

「何でもって？」

気になり質問するライト。

「何でもだよ、課題をやったり、探し物を探したり、時には、エスコートしたりとか色々だよ。」

具体例を示す友斗。

「なるほど、ですから、パーティーとかでも見かけることがあったのですね。」

納得したような美咲。

「っとぉ、もう終わりの時間か。またな。」

「ふう、もう終了か。早いものだったな。」

「まっ、機会があったら万事屋を利用してくれ。」

上から順に、リュート、ジュダイ、友斗。

「２－Ｄは集合。集まり次第、教室へ戻るぞ。」

カリンの掛け声で２－Ｄが集まる。

「「それでは最後に、１－Ａの皆さんに、何か困ったら是非とも万事屋へ。
報酬次第で、何でもやります。ご利用の際は陸奥友斗かリュート＝スクラインか
万事屋の教室まで。ご利用お待ちしてます。」」

宣伝してから帰る、リュート、友斗。ちゃかっりしてる２人であった。

to be continued…

EPISODE：4（後書き）

今話で魔法の説明が……

結構辛いものがあった。

感想とか貰えると俺とか、友人とかが喜びます。

会えたら次話でお会いしましょう。それでは

EPISODE：5（前書き）

この作品需要あるのかねぇ

友達と熟思ってる今日

まぁ自己満足的な物だから良いけどえ

EPISODE：5

新しい学校生活が始まり早数ヶ月。　時間が経つのが早いって？
気にしたら負けさぁ。

そんな、とある日の放課後。

「学年別トーナメントが遂に来週まで迫ってきている。
各々準備は怠らないように。　連絡は以上だ。」

「起立、さようなら。」

掛け声と共に２－Ｄの教室から生徒が、部活やらなんやらで相次ぎ出てくる。

――ちょいと補足を

【学年別トーナメント】
言葉の通り学年別で行われるトーナメント方式の戦い。
参加は自由で１～２人での出場。参加者には、学園支給のネックレスかブレスレットの
どちらかを着用してもらう。一定のダメージ量に到達すると転移魔法が発動する。
疲れは残るが、ダメージはそちらに溜まっていくというシステム。
このトーナメントには、外部からも観戦しに来るため、１年生は魔法等にどの程度馴染んだか、２年生はどのくらい成長したのか、３年生は進路等に向けてのアピールと言った目的がある。
因みに、優勝者には１ヶ月の食堂無料券と万事屋の無料券（３回という限定）が贈呈されるとか。

閑話休題

「さて、貴様ら2人は何をしているのだ？」

カリンが教室に残り、何やら打ち合わせをしている人物2人に聞いた。

「そりゃぁ、来週に向けての活動方針と作戦を決めてるところっすね。」

話し合ってた方の1人リュートが答える。

「ほう、出場するのか。貴様らは出場しないものかと思っていたが。」

カリンがちょっと驚いた感じで言う。

「ある程度腕が立つっていうところを1年生に見せとかないとねぇ。まぁ、所謂1年への売り込みっていう奴っすよ。」

もう片方、友斗が答える。

「そういうことか。」

納得したような、カリン。

「「そういう、事っす。」」

「目標は3回戦までで良いか？リュート。」

「そこら辺が妥当だな。」

「なんだ、そこまでなのか？」

提案した友斗とそれを了承したリュートに疑問を抱くカリン。

「あんま目立ちすぎず、運とかじゃなく実力で勝ち進んだっていうことを証明できるのが3回戦辺りなんすよ。」

理由を話す友斗。

「これ、以上行くと報酬が高そうとか思われて依頼してくれる人が減るんですよ。」

それによって考えられる影響を話すリュート。

「色々と、考えているのだな。」

感心したようなカリン。

「「まぁ、建前はこんな所っす」」

「は？」

呆気にとられるカリンを無視し、続ける2人。

「これ以上に進出すると、撮影が厳しくなるんすよね。」

「優勝者には万事屋の3回だけっすけど、少なくとも9回。多くて18回はタダ働きっすからね」

「出場してるか否かは置いといて、生徒やら教師やらを撮影した写真を売ってかないと損にしかならないんすよ。」

「そのような事を、教師である私の前で話しても良いのか？」

2人の本音を聞き、頭を抱えながらも聞くカリン。それに、困惑した表情を見せる2人。

「「……ご利用待ってます。」」

取り敢えず開き直った2人。

「生徒だけではなく教師も、とは。全く、聞かなかったことにしといてやる。」

そんなカリンに瞠目する2人。

「「マジで！？あざっす」」

とても喜ぶ2人。それを見てままだまだ子供だなと思うカリン。そんな時、

「あっ、ヤベぇ。用事思い出したわ。っつうことで帰る。」

ふと思い出し、颯爽と帰っていくリュート。残された友斗とカリン。

「そんじゃまぁ俺も行くとしますか。　そういや何で写真のことを

見逃そうと？
……あぁ目をつけてる人がいるとか？」
ふと思い出し気になり聞いた友斗。
「……」
場には沈黙が
「……えっ、マジっすか？冗談のつもりで言ったのになぁ」
内心ミスったァァァァ。これ如何する俺、如何したらいい俺？と大慌ての友斗と
教室に差し込む夕日で良く表情が見えないカリン。
「あれっすか？１－Ａの担任の右京さんですか？学生の頃からの付き合だし？」
と冗談をいう友斗。それに対し、
「違うわ莫迦者。……」
即答で否定したカリン、だが後半は全く以て聞き取れなかった。心許ないが顔が赤くなってるようにも……
（え？何これ？本当にカリンさんか、これ？めっちゃ可愛く見えるんですけどォォォ）
何時もとは違う所をみて、そう思っている友斗。

（もうちょっと見てたいが、このままだと居た堪れないので即刻退散。）

「それじゃぁ、俺はここらへんで。さようなら～」

脱兎のごとく教室を駆け出した友斗。

「……察しろ、莫迦者が」

誰も居なくなった教室で呟くカリン。そして、カリンも仕事へと教室を出ていった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｅｄ…

ＥＰＩＳＯＤＥ：５（後書き）

どもども、このごろやっつけ仕事になってきてる００１です

だって仕様がない　俺のクラス（男子）が大学決まり過ぎ

指定校は言うまでもないがＡＯと公募って……

１０／１５人って、

まぁ、次回会えたら良いなぁ

EPISODE：6（前書き）

文才が欲しいぜよ

一人称にチャレンジしてみたよぉ

だというのに、友斗の出番が……

EPISODE：6

†ライトＳｉｄｅ

なぜ、こんな状況になってるんだろう？

「さて、降参するのなら今のうちだが、どうするかね？全校生の前で無様な格好は見せられないだろう？それとも、そんな姿を希望しているのかい？」

「それとも勝てると思っておられるのなら思い上がりも甚だしいですわ。」

「そんなもの、やってみなきゃ分かんねーだろうが。それに、無様な姿を見せるのはそっちかもな？」

挑発してる男子が１人、高飛車な女子が１人、それに食って掛かる友人が１人。

本当に、なんでこうなったぁぁぁぁ！？

取り敢えず落ち着け俺、どうなったらこうなるのか思い出してみよう

――Ｏｎｅ　ｗｅｅｋ　ｂｅｆｏｒｅ

「なぁ、涼介。」

「なんだ、ライト。」

学校も終わり、気になったことがあったから涼介に聞いてみたいことがあったから、

「リュート先輩ってそんなに凄いのか？」

取り敢えず聞いてみた。

「藪から棒だな、オイ。凄いって云うもんじゃねぇな。トルニアだけならず、世界のいたる情報まで掌握。
さらに、国家からも依頼されるほどのクラッカーらしい。痕跡を残すことないほどって言われてる。」

「らしいってのは、なぜ？」

「それを、立証できないからだよ。見たことがある人っていうのがいないからな。
まぁ、確か成績も結構良いな。学年でも上から数えたほうが速い。
此れ位しか俺も知らね。」

脈絡もなかったが、答えてくれた涼介。良い奴だな。そして、取り敢えず

「凄いことが分かったわ。それじゃ、友斗先輩は？」

もう1人気になる先輩についても

「友斗先輩は、わかんね。」

「はっ？」

「だから、何にも掴めないんだよ、友斗先輩は。リュート先輩といい、友斗先輩といいこの2人は謎が多い。」

意外だ、涼介にも分からないことが有るなんて。リュート先輩がどれぐらいだが検討つかないが、

結構広い情報網を持ってるらしいけど……それでも掴めないなんてあの2人何者だよ？

「……です。」

女子の声？

「涼介。今、声聞こえなかったか？」

「あぁ、聞こえたぞ。」

空耳じゃなかったらしい。

「「行ってみるか」」

やっぱり、気が合うねこいつとは。

「どうだい、僕と一緒にお茶でも。」

「結構ですと、言ってるじゃないですか。」

「僕の誘いを断るほどの予定でもあるのか？」

うわぁ、なにアイツ。絶対ナルシストだなアイツ。

「誰あいつ？」

こういうときは隣の涼介に聞いてんのが速い。

「絡んでるのは西遠寺駆流（サイオンジカケル）由緒ある西園寺家の息子だな。絡まれてるのはマイ＝ヒューズ俺らと同じで平民出身だな。」

西園寺って、獅堂にも劣らない大手だろ。アレかこんなんでいいのか？

顔に出てたのか涼介が優しい目で見てくる。

まぁ、いいか。取り敢えず助けますか。とアイコンタクトしてから、

「いやぁ、悪いなぁ。掃除が長引いちまってねぇ。待ったか？」

「本当ならもうちょい早く来れたんだけどね。」

上から俺、涼介である。困惑気味の二人を無視し彼女の側まで近づき小声で、

「話、合わせてくれ」と頼む。涼介も「文句は後で聞くから、ここは一旦な。」頼んでいる。

女子のほうも承知したのか「そんなに、待ってないですよ」と答えてくれた。

話がわかる人でよかったぁ。ここで、俺と涼介は間髪入れず、

「「それじゃぁ、失礼しま～す」」

あとは即刻ここから離れるだけ

「待ちたまえ。そんな、眉唾もの信じられるわけないだろう。それに、女子の方も
君たちなんかよりも僕と居たほうが嬉しいはずさ。」

痛々しいよコイツ。なんか悲しくなってきた俺。

あぁ、涼介がヤヴァイ。

「うっせえんだよ。てめぇ嫌われてるって察しろよ。そんなんだから、彼女とも喧嘩して別れそうになってんだろうがこの［ピー］野郎が。」

うわぁ、これは西遠寺に同情するわ。……コイツにですら彼女いるのに、俺ってのはいったいなんなんだ？

そして、その場を後にした涼介を追いかける俺って。

そして、冒頭に戻ると。

俺なんも悪くねぇじゃん。どちらかと言うと俺も傷ついた側じゃね？

悪いのはこいつじゃねぇかぁぁぁ。巻き込まれちまってるだけだよ俺。

誰か助けてぇぇぇぇぇ。お願い、３００円あげるからぁ。

『さぁ、それでは早速始めるとしましょう。』

無慈悲な司会者。現実って辛い。

まぁ、頑張りますか

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｅｄ…

ＥＰＩＳＯＤＥ：６（後書き）

テスト近いっていうのに俺何してんだ？

大学に願書も送らないとあかんし。

まぁ、見てご覧の通り友斗は一切出ませんでした

次回は出るはず……

まぁココらへんでではまた会えたらお会いしましょう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1756y/

Magic　Story(仮)

2011年11月26日23時47分発行